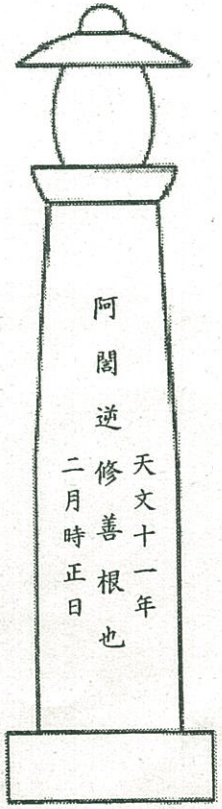
(5) 石塔婆群

上分剱ギの石塔婆群　字剱ギの庵ノ本に近い市道沿いに、一群の石塔婆群があって、六地蔵・五輪塔・板碑・開山碑のほか、供養塔が並んで立っています。この石塔婆群は、伊万里市郷土研究会の調査で、石仏に刻まれた紀年が今から四六〇年ほど前、戦国時代の中期、天文や元亀時代に建てられた伊万里市で最も古い石造物であることが分かり、石像文化遺産として貴重なものといわれています。

上分剱ギの石塔婆群

六地蔵塔　石塔婆群のほぼ中央に建っていて、基礎石・竿石・中台・地蔵を彫った塔身・笠を重ねた石灯籠に似た形の石仏です。竿石は四角柱で下部の幅が五〇㌢・上部が二五㌢・高さが一〇〇㌢の砂岩の一本柱になっていて、正面に図のような銘文と紀年が刻まれています。



天文十一年（一五四二年）から四六〇年ほどの時代を経て、今では風化して損耗がひどく刻字がかすかに残る程度で判読も困難となりつつあります。紀年が刻まれている六地蔵では伊万里市内で最も古い石仏です。

塔身は六種の地蔵が肩を寄せ、肘を接して一回りする形で浮き彫りに刻んだ造りとなっています。竿石に「阿闍逆修善根也」とあります。逆修とあるので、生前に死後の冥福をもたらすよう祈り供養を行って、六地蔵を建立したものと思われます。

天文　逆修六地蔵

六地蔵信仰は、平安時代に中国から日本にもたらされ、全国に広まり、六道の入口に地蔵菩薩が立って救ってくださることから、境界神的性格をもち、村や墓地の入口などに祭られて、南北朝末期から室町期にかけ盛んに造像されました。

剱の六地蔵も天文と年号が刻まれていることから室町末期の戦国時代に建てられ、この地域でも当時、住民の六地蔵信仰が盛んであったことを物語っています。

五輪塔　六地蔵の左側に立っていて、地輪から空輪まで六四センチの大きさです。地輪は下部の幅が二五センチ、上部が三〇センチで上面が広くなっています。地輪の正面には右に「為阿闍」、左に「天文七戌二月□□」と刻んであります。石材が損耗して読みにくいが阿闍と読めます。紀年も天文か天正

かはっきりしませんが、天文七年は干支で戊戌で「戌」と合うので天文に間違いありません。水輪は円形で四方に金剛界四仏の種子（仏を表わした梵字）が刻まれています。

天文七年（一五三八年）は今より四六〇年ほど前で室町時代末期にあたります。当時の庶民は五輪塔を建てることは稀であったので、阿闍と言う人は地位のある人であったに違いありません。紀年銘のある五輪塔では伊万里市内で最も古いものといわれています。

不動明王板碑　石塔群の右端に建ててあります。高さ約一メートル八〇センチで幅が八〇センチもあり厚さが一二センチの板状の砂岩の板碑です。上部に不動明王の種子カンマンを火炎光で丸く囲み、蓮華座に載せる図形の線刻がなされています。

碑面の下方中央に、「現當□□□」とあって下の三文字は読めませんが、右に「為権少僧都阿全」、

天文の五輪塔

不動明王板碑

左に「元亀四年三月十六日」（一五七三年）と刻んであります。大日如来が恐ろしい姿を仮に現わしたとされる不動明王と僧侶の階級、権少僧都が付されてあるので真言密教の僧侶「阿全」の供養塔と思われます。元亀四年（一五七三年）は、同所の五輪塔より三五年後に建てられたことになります。

開山碑　六地蔵と板碑の間に立っていて、基礎石の上に高さが五四センチ・幅四〇センチの竿石の中央に「□□快長」、右に「□開山」、左にも刻字があるようだが全く読めません。快長は、供養塔と思われる石塔にも「権少僧都快長」と刻字されてあるので、この僧侶が開いた庵寺があったに違いありません。地元の言い伝えにある、「庵ノ本」の庵寺説に結びつくものと考えられます。

紀年銘は分かりませんが、庵寺の開祖「快長」が「阿闍」「阿全」より前にいた僧侶ではないかと思われます。

供養塔　五輪塔の左側に三基の供養塔が並んで立っています。左端の塔には梵字の下に「為権少僧都快長」と刻まれ、高さが約一メートル一〇センチ、幅が上部三五センチ下部五三センチの凹凸のある形の自然石の塔になっています。建立紀年は剥離したのか見当りません。刻字に権少僧都と付されてあるので、

庵寺開山碑

供養塔と寄せ仏〔五輪塔・法篋印塔〕

庵寺開山の僧「快長」の供養塔と思われます。僧侶「快長」、「阿闍」、「阿全」は、庵ノ本（庵寺）に縁の僧侶と思われ、三人の結びつきや世代の違いはどうなのかを思いめぐらしたくなります。

この供養塔の右側には仏像を載せた竿石に「南無阿弥陀仏」と刻んだ供養塔があります。

また、その右側に高さ約一メートル三〇センチ、幅が約四五センチの自然石の供養塔があります。上部に円で囲まれた梵字を付して「浄□」「妙山」「妙泉」と横に並べ、その下に「為菩提也」刻まれているのがかすかに残っています。紀年銘は剥離したのか認められません。三人を一つに合わせた供養塔と思われますが、どんな人物かは分かりません。自然石造りからみて他の供養塔とほぼ近い時代のものと思われます。これらの石塔婆群は、ほとんど僧侶に関わるものといえます。

地元で言い伝えられてきた話や、剱キに住む古老から聞いた話によれば、江戸時代初期の頃までは、黒岳に近い山沿いの「庵ノ本」に住居を構えた人たちの、集落があったということです。これらの石塔群の紀年銘からみて、おそらく天文・元亀時代には住みつき、そこには庵寺が建っていて住民の信仰の拠り所となっていたと思われます。時代を経て山を下り、より住みよい「剱キ」や「平古場」など上分一帯に集落が移ってから、庵寺は廃寺となり地名だけが残ったと思われます。

後になって、庵ノ本に散在していた僧侶の供養塔を寄せ集めて、現在地に祭られているということです。当時の人たちの僧侶に寄せる思いを知らされ、よほど知徳のある僧侶であったかと思われます。

この庵ノ本の居住説を裏付けるものとして、以前、先祖が庵ノ本から剱キに移住した末孫で、今では今福町に居住する山口一男氏（平成一五年一二月没）より、次の話を聞くことができました。

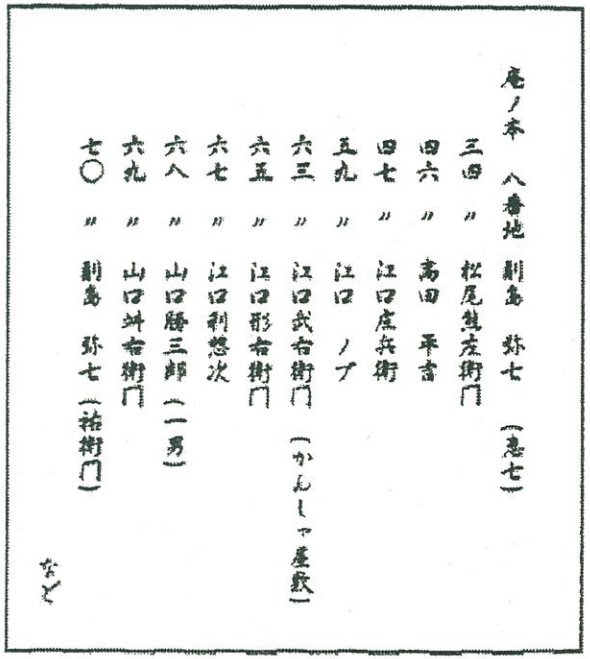
山口氏が本籍地変更を伊万里市役所でされたとき、祖父にあたる「嘉永六年生まれの山口善右衛門」の本籍地を申請して、旧戸籍簿を調べた結果、当人の別名『山口勝三郎　本籍地　庵ノ本六十八番地』と分かって変更手続きができました。他にも、現在上分区在住の方の「庵ノ本」本籍地だった先祖の名前も十戸ほどあったとのことです。

現在は、むかし宅地であった所の「庵ノ本六十八番地」や他の本籍地番の土地は、山林や畑となってしまい、山道沿いに「かんしゃ屋敷」の呼び名や地番だけが残っています。現地に踏み込んでみると、黒岳の山中、黒尾岳川の源流に近い谷間沿いの斜面に、開けた平坦地があって畑が広がっています。「かんしゃ屋敷」と名のある畑には五輪塔・法篋印塔などの部分石が数多くありました。この一帯は昔からの開発の跡が感じられ、住居が点在する集落があったことが頷けます。

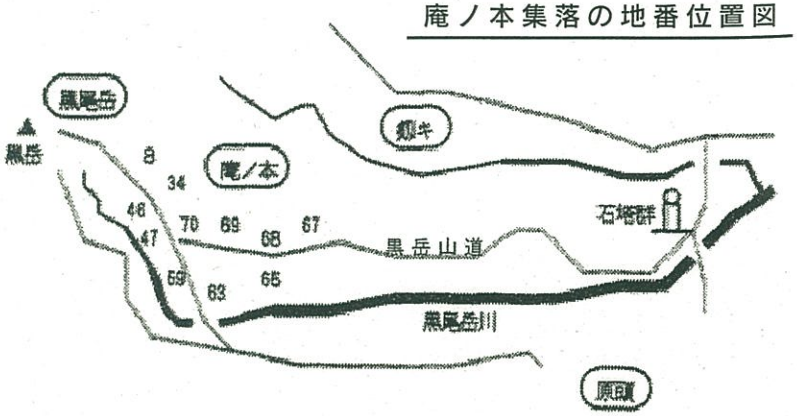
この山奥の地「庵ノ本」は一説によれば、松浦党岸岳城主波多三河守親が文禄の役（一五九二年）のとき、秀吉の怒りに触れ筑波山に流されて城と領地を没収された後、岸岳城崩れとなった一族が隠れ住み波多氏再興を企てた所といわれています。

また、庵ノ本から一・五キロほど東の武内町柚ノ木原に、岸岳城守護のため鬼子嶽にあった御神体を移し祭った鬼子嶽五社稲荷大神があります。境内に城主波多三河守や松浦党若林左馬守の遥拝碑がありますが、岸岳城が取り潰されてから一族がこの地で再興を諮り、時が来れば黒岳に陣を構え敵を討とうとしてい

庵ノ本居住者と地番



庵ノ本集落の地番位置図



※剱石塔群より黒岳山道を１kmほど奥へ行った山間の開けた土地。
今では原野や畑になっている。

たという、神社にまつわる宮司（ぐうじ）の話もあります。このことは郷土史研究家松尾香氏の著書にもあります。これらのことからも黒岳山麓は松浦党との縁（ゆかり）の地であることが分かります。

昔から中野原の古老は、庵ノ本は岸岳末孫の地で、中野原はその流れをくむ人達が住んでいる所という話をしていますが、その思いがいっそう深まります。

石塔婆群の中には、庵ノ本周辺から集められた名も無い小形の五輪塔（ごりんとう）や法篋印塔（ほうきょういんとう）があり、また、庵ノ本の畑から五輪塔などの残欠が出土することからも、庵ノ本が今後の調査次第では、より具体的な歴史的物証が得られる可能性を秘めている所といえます。